

生きがい考 (2)

— 江戸時代以前の生きがい —

Concept of Ikigai (2)

— Ikigai before the Edo era —

神田 信彦*

Nobuhiko KANDA

要旨：本研究は、「生きがい」という語が江戸時代以前にどのような意味を持つものとして使われていたのかを検討した。まず、梅棹（1980）の解釈をもとに「生きがい」の語の成り立ちを検討し、さらに古典、古文書及び古記録に表れる「生きがい（ひ）」、その前駆語と考えられる「生けるかひ」及び類語の検討を行った。その結果、「生きがい」の意味は限定されたものではなかった可能性が高いこと、「生きがい」はその類語の中の一つに過ぎなかった可能性が高いことが明らかとなった。

キーワード：生きがい 生けるかひ 生甲斐

1. はじめに

前稿では、明治期から第2次世界大戦敗戦までの期間に「生きがい」がどのような意味を持つ言葉として扱われていたかを検討した。その結果、主に以下の諸点を確認した。(1) 明治末年近くまで「生きがい」は国語辞典に見出しが載ることはなかった。(2) 国語辞典に見出しが載るようになってもその意味は「生きている甲斐」のように紋切り型であった。(3) 「生きがい」は特定の意味ではなく、さまざまな意味に用いられていた。特に(3)については、立身出世や忠君愛国だけが明治期から第2次世界大戦敗戦前の日本人の「生きがい」であったとする考え方を否定するものであった。

ところで、江戸時代以前は「生きがい」はどのような意味で使用されていたのであろうか。特定の固定的な意味を持つものとして使用されていたのであろうか。当時の人たちの間では、生き方に関わる語として扱われていたのであろうか。本稿では、江戸時代以前において「生きがい」がどのように用いられていたのかを検討することによって、当時の「生きがい」は社会や共同体によって規定された意味での「生きがい」であった、とする和田（2001）、鶴若（2003）や野田

* かんだ のぶひこ 文教大学人間科学部

(1988) の考え方の正否を二つの観点から検討した。一つは古典に表れる「生きがい」の用いられ方を検討する事によって、いま一つは「生きがい」の語の成り立ちを検討する事によって行った。

2. いきがいの語としての成り立ち

1) 梅棹忠夫の解釈から

前稿でその使用例や辞典での意味の扱いで示したように、生きがいの意味や使われ方は多様である。では、元はどのような意味が起点となっていたのであろうか。

生きがいの意味の成り立ちについて梅棹 (1980)¹⁾ は「～がい (かい)」の意味を考える事から始め、次のような解釈を行っている。

「何々がいが」あるということ、あるいは「何々しがい」があるということは、要するに何か、緊張、努力があって、その結果として成果がある、そういうことでしょう。何かがんばってよかった、ああよかった、よかったというのが、「何々がい」があったということだとおもうんです。(66 頁 2-4 行；下線筆者)

生きがいがあるというのは生きたかいがあった、生きたということの結果として、何かの成果が得られた。あるいは報われたということです。(67 頁 5-6 行)

何かを行ったら成果が得られ、そこには喜びや満足感に通ずるものが伴うということであろう。そこから生きがいの意味を「生きたということの結果として、何かの成果が得られた。あるいは報われた」が導かれる。

さらに未来への志向性を示し、

生きるということは、何か一つの期待があるんですね。期待を持って努力して生きてみた結果、期待どおりのおかえしがあればこれは生きがいがあったということになる。それがなかったら生きがいがなかったということになる。論理的に、どうもそういうことになる。(73 頁 9-12 行；下線筆者)

とも述べている。つまり、生きていて何かを行う、そこには何らかの期待が先行し伴っている、その結果、成果を得ることであり、その認識である。明確には述べられていないが、「がい (かい)」の解釈から、その認識により、喜びを覚える、というのであろう。単に「～がい (かい)」の場合は「何か、緊張、努力があって」であるから時間はそれほど長いものとはならないのだろう。一方、生きがいの場合は、生きる (生きてきた) であるので、より長い時間経過を前提に考えられるのであろう。

梅棹の生きがいについての解釈を図式化すると [期待] ⇒ [生きる] ⇒ [成果] ⇒ (その認識) ⇒ [喜び] と表現される。

この解釈について、「かい (ひ)」の意味をみることによって検討を行ってみよう。まず、いくつかの国語辞典の「かい (ひ)」の記載と比較してみよう。表 1 に刊行が明治、大正、昭和、平

成の各時代に出版された国語辞典にある「かい（ひ）」の意味と古語辞典の「かひ」の意味を示した。

表1 「かい」「がい」の意味（明治から平成までの国語辞典から抽出）

辞典名	刊行年		意味等	出版者
言海	1889 (明治 22)	かひ	作業（シワザ）ノ結果（デキバエ）。キキメ。詮（セン）。	大槻文彦
大日本国語辞典 (第1巻)	1919 (大正 8)	かひ	物事を行いたるだけのききめ。しるし。ききめ。詮。効驗。	金港堂書籍
広辞苑 第二版	1969 (昭和 44)	かい	行動の結果としてのききめ。効果。	岩波書店
		がい	多く動詞の連用形に付いて) その行為の結果としてのききめ、する値打ちを表す。	
大辞林 第二版	1995 (平成 7)	かい	(その行為に値するだけの) しるし。またそれだけの値打ちや効果、せん。	三省堂
		がい	動詞、またはそれに使役・受け身の助動詞の付いたものの連用形に付いて、その行為の結果としての効果・価値・張り合いなどの意を表す。	
新明解国語辞典 第六版	2010 (平成 22)	かい	何かをした（することによって得られる）好ましい結果や充足感	三省堂
角川 古語大辞典 第一巻	1983	かひ	接尾語として用いるときは「がひ」と濁音化する。ある行為の結果として起こる望ましい事態。代償。効果 (第1の意味のみ抜粋)	角川書店
新明解古語辞典 第三版	1995	かひ	①(行動に対する)効果。むくい。 ②価値、値うち。(主観に即していった場合)はりあい。	三省堂

いずれも何かを行った結果得られる効果を表す内容が、意味の中心として述べられている。しかし、「何らかの期待をもって」を示す記載は見られない。一般的に人が行動を起こすときには何らかの目的があるので、これらの意味には期待が当然含まれていると考えることもできよう。また「ああよかった。よかった。」を表す意味の記載はなく、わずかに『新明解国語辞典』にある「充足感」がこれに関係する意味として考えられるだけである。

「角川 古語大辞典」及び「新明解 古語辞典」においても第一の意味として前述の国語辞典と同様の意味を掲げている。なお「角川 古語大辞典」では、「代償」が記載されている。なんらかの行動の結果得たものを行動の代償として捉えていたということであろう。

古典を探ってみると、平安前期に作られたとされる『竹取物語』の七にある中納言石上麻呂の「燕のもたる子安貝」を探しに行く顛末では、燕の古糞を握ってしまった事を知った中納言が、「あなかひな（貝無）のわざや。」と言っている。それに続けて本文は「思ふに違ふことをば、かひなしとは、いひはじめける」と続けている。竹取物語が実話で無いのは紛れもない事実であ

るが、「思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける」は期待はずれだったことを「かひなし²⁾」と表現すると教えているのであり、「かひ」は期待を前提とする意味として古くから用いられていたことを示すものと考えられる。

さらに竹取物語は続けて、大人げないことをしてけがをした事を恥じながら寝こんでいる中納言に、かぐや姫が見舞いの歌を送ると、やっとの思いで「かひはかくありけるものをわびはて、死ぬる命をすくひやはせぬ」と返歌を書き息絶えた。これに続け「それよりなん少し嬉しきことをば、かひありとはいひける。」(下線筆者)と結んでいる。「少し嬉しきこと」は「よかった、よかった」に対応すると考えることが可能であろう。

「燕のもたる子安貝」の文脈から考慮するとこの「かひなし」「かひあり」に関する意味は梅棹の「がい(かい)」についての考え方を支持するものと言えよう。

こうした成り立ちを持つ「かい」に「生きる」が結びつき「生きがい」となったものであろうか。生きがいのもとの意味は「何かを期待(希望)して生きてきて(生きていて)何かを行った結果得られる(た)効果・成果・効験であり、これには喜び、言い換えれば肯定的感情が伴う」と表現できる。平易に表現すれば「生きていて何かよいことがあるという期待(希望)やその成果であって、それには喜びのような感情が伴う」ということであろう。ここまで述べてきたことから「生きがい」という語の成り立ちに関する梅棹の解釈は概ね支持できると結論できよう。

2. 「生けるかひ」から「生きがい」へ

1) 文献にみるイキガイの意味 古典・古文書・古記録から

江戸時代までの「生きがい」は言葉として生活の中でどのような意味で用いられてきたのであろうか。イエズス会が1603年から1604年にかけて刊行した『日葡辞書』(収録語数約32,000)がある。これは知られているように同会がキリスト教布教のために日本にやってくる宣教師のために作成したものである。これには「Iqigai mo nai.」と項目が立ててあり、それを使った文例として「iqigai mo nai fito. (生きがいもない人)」があげられ、ポルトガル語への訳として「生きていてもなんの益もない人」(いずれも『邦訳日葡辞書』から引用)と記載されている。梅棹の解釈に従えば、例文の意味は「生きていてもよいことを期待できない」となる、つまり当事者にとって益が期待できないと考えられる。しかし別の可能性として「世の中の役に立たない」も考えられる。さらには両者の意味が含まれているのかもしれない。ここで明確なことは、どの程度一般的であるかは定かでないが、少なくとも安土桃山時代から江戸時代初頭にかけて「生きがい」が口語つまり話し言葉として、用いられていたことである。さらに、『日葡辞書』を編纂した宣教師は、布教にあたり「生きがい」が意味のある言葉であると考えた可能性を指摘できる。

次に文語に目を転じ、古典³⁾の中にあらわれる「生きがい」を探ってみると、まず室町期前期(1371、2年頃)に作られたとされる『太平記』に「況や只今マデ平氏ノ恩顧ニ順テ、敵陣ニ在ツル者共、生甲斐ナキ命ヲ続ン為ニ、所縁ニ属シ 降人ニ成テ、肥馬ノ前ニ塵ヲ望ミ、高門ノ外ニ地ヲ掃テモ、己ガ咎ヲ補ハント思ヘル心根ナレバ、」(『太平記(巻第十一 五大院右衛門宗繁謙_相模太郎_事)』;『日本古典文学大系 34 太平記一』(岩波書店) 362頁からの引用)の用例がある。

「生甲斐ナキ」に関してここでの意味を文脈から考えると、「生きていてもよいことが期待できない」=「生きていても意味がない」ということであろう。

室町時代前期に作られたとされる『曾我物語』の巻第七の「斑足王が事」では、母に勘当を言い渡された弟五郎を十郎が引き立て「とてもかくても、いきかひ無き冠者、有りても何にかあふべき。御前に召し出だし、細首打ち落として、見参に入れん」(『曾我物語(巻第七 四 斑足王の事)』;『日本古典文学大系 88 曾我物語⁴⁾』(岩波書店) 282 頁からの引用)と述べるくだりがある。

同様に室町期に成立した(『曾我物語』よりは後年)とされる幸若舞の『夜討曾我』には、主人である十郎、五郎から仇討ちに加わらず故郷へ戻るように言われた下人の鬼王丸(と道三郎)に「死ぬべき時にしなねば生き甲斐はさらに候わず。」(『幸若舞 3 敦盛・夜討曾我他』(東洋文庫 426 平凡社) 206 頁からの引用)と言わせている。

また江戸期のものになるが、1685年に初演された近松の『出世景清』の「六波羅新牢の場」で、牢につながれた景清は、そのもととなる密告を行った妻阿古屋が二人の子どもを連れ面会に来たが、むごいことばをかけるだけであった。そこで阿古屋は「なう、もはや長らへて何方へ帰ろうぞ。やれ子どもよ、母が誤り足ればこそ、かく詫び言いたせども、つれなき父御の言葉を聞いたか。親や夫に敵と思はれ、おぬしらとても生き甲斐なし。このうへは父親持ったと思ふな...。」(『近松門左衛門「曾根崎心中」「けいせい反魂香」「国性爺合戦』(角川書店) 33 頁からの引用)と言ひ、二人のわが子を刺し殺し自分も自害して果ててしまう。

それぞれの「生きがい」の意味は、「生きる意味(あるいは価値)」と言い換えることができよう。しかし、それぞれの文脈を追ってより丁寧に検討を行うと、『太平記』にみられる「生甲斐ナキ」は前に述べたように「生きていてもよいことが期待できない」であると考えられ、『曾我物語』と『出世景清』の2例は、いずれも親子や夫婦の情が関わる場面で表現されており、それが断ち切られてしまったのでは、「生きている喜びや希望」がないと解釈することができる。ただ一つ『夜討曾我』だけがその文脈において世間からの評価を意識して「生き甲斐」を使っていると考えられる。だがこれにしても前後関係から判断すると、「よいことが期待(できない)」という意味も同時に含んでいると考えるのが適当であろう。

さらに、古記録や古文書を調べてみると、筆者が現時点で確認できているのは1点のみである。鎌倉時代末期の応長元年(1311)11月の「備前野田荘々官保広申状⁵⁾」(東大寺文書四の三十八)に「左右、構種々不実、独所従ヲ無生甲斐被責損之条、希代難有所行也」(底本 鎌倉遺文)とある。備前野田荘々官の保広は、宗貞という人物と争いが生じ、宗貞に与した代官対馬殿とを東大寺に訴えた。その申状の最後に近い部分に「無生甲斐」の表記が見られるのである。ここでは「生きていく希望もなく(なるように)」というような意味として理解することができる。と筆者は考える。

なお、「生甲斐」の読みに関しては必ずしも明確ではなく、『太平記』については、慶長10年(1610)に刊行された『太平記音義 上巻⁶⁾』には、「生甲斐」の読みとして「イキカヒ」と記載されている。一方、元禄4年(1691)に刊行された『参考太平記⁶⁾』には「生^{イキ}テ甲斐ナキ命」と記載されている。このように江戸時代に2通りの読み方があった事実は、『太平記』が作成された当時の「生甲斐」の仮名表記が「イキカヒ」であったという判断を留保させる。これをもとにすると「備前野田荘々官保広申状」についても「無生甲斐」を「イキガイナシ」と読んだのか、「イキテカヒナシ」あるいは「イケルカイナシ」と読んだのかあるいは別の読みかを俄には判断できない。

したがって、「生甲斐」という表記だけをみれば、鎌倉末期まで遡ることができるものの、発音・読みとして「イキガイ」がいつ頃から用いられたかを断定することは困難であるが、少なくとも安土桃山時代からこれに近い室町時代後期から末期には用いられていた可能性が高い。

2) 「生けるかひ」について

ではそれ以前は、どのような状況であったのであろうか。「生きる」は上一段活用であるが、よく知られているように元々は、四段活用「生く」であり、室町期になって「生く」は上二段活用への変化も現れ(『日本語の歴史』第5巻23～24頁)、その後、上一段活用に変化したとされる。しかし活用の変化の時期については表2の通り諸説ある。

平安時代には、四段活用「生く」の已然形「生け」に完了の助動詞「り」の「連体形である「る」が続き「生ける」となり、これに「かひ」が結びつき「生けるかひ」が使われていた。「生けるかひ」は江戸時代末期に編纂された『雅言集覧⁶⁾』にも掲載されており、平安時代の古典(日記文学、歌物語等)以来使われていた語であり、「生きがひ」の前身である可能性が高い⁷⁾。

表2 各辞典文献による「生く」の四段活用から上二段活用への変化の時期の諸説

番号	辞典・文献	刊行年等	移行時期
①	日本国語大辞典	1972 小学館	中世以降上二段活用が多くなる
②	日本文法大辞典	1971 松村明編纂 明治書院	平安時代あたりから上二段活用を用いることが多くなった。
③	岩波古語辞典	1974 大野晋他 岩波書店	鎌倉時代以降上二段活用が現れた。
④	国語史概説	1943 湯沢幸吉郎 勉誠社	平安時代の蜻蛉日記の例が最も古いらしく、その後ずっと今日まで続いている。
⑤	品詞別日本文法 講座第三巻	1972 鈴木一彦・ 林巨樹 明治書院	平安時代になると、それまで四段活用であった動詞が二段活用へ変化する傾向を見せている。
⑥	「生く」の活用 について	1977 櫻井昭光 国語学	上二生くの発生は、十一世紀初頭から十二世紀初頭に欠けての間であるといえる。 一方、四段生くは(中略)十三世紀に入って(中略)消滅していったのではないか。
⑦	日本語の歴史5 近代語の流れ	1976 下中邦彦編代 表 平凡社	兼好の『徒然草』までさかのぼると、まだ二段活用は使われていない。(25頁2～3行)
⑧	角川 古語大辞典	1984 中村 幸彦 角川書店	古くは四段活用で、中世以後上二段活用が現れるが、連用形はどちらとも決められない。完了の助動詞「り」を伴うかなり後まで用いられている。

(櫻井(1977)の記述をもとに作成、⑥～⑧は筆者が追加)

これについて今回確認できた最も古い用例は、年代は不確定であるものの紀貫之（87?～945年）の『貫之集』にある「あけたてばまづさすひもの糸よわみたえてあはずはなどいけるかひ」であった。平安中期である958年頃の成立とされる後撰和歌集の卷十三 恋五に「年をへていけるかひなきわが身をば何かはありと人にしられん」（よみびと知らず）がある。これらのほか和歌には少なからず「生けるかひ」が登場している。

10世紀末頃に書かれたとされる随筆「枕草子」には「夏昼寝して起きたるは、よき人こそいますこしをかきなれ。ゑせかたちは、つやめき寝腫れて、ようせずば、頬ゆがみもしぬべし。かたみにうち見かはしたらん程の、いけるかひなきや。」（一〇五段 みぐるしきも：『新日本古典文学大系 39 枕草子』（岩波書店）149-150頁からの引用）の文がある。

さらに1001年頃に執筆が開始されたとされる『源氏物語』七帖「紅葉賀」には「げによるづにかしづき立て、み奉り給ふに、生けるかひあり、『たまさかにても、かゝらむ人を出し入れて見むにます事あらじ』と見え給ふ。」がある。『源氏物語』にはこのほか8例（「夕顔」（四帖）、「須磨」（十二帖）、「澁標」（十四帖）、「胡蝶」（二十四帖）、「若菜下」（三十五帖）2例、「夕霧」（三十九帖）、「橋姫」（四十五帖））がみられる。この他、平安中期の『浜松中納言物語』（6例）、『大和物語』『蜻蛉日記』及び『栄華物語』に各1例が、また鎌倉中期から後期の間に成立したとされる『源平盛衰記』（食巻三十一巻）には2例みられる。『源平盛衰記』では「年比の平やを捨て鳩のはにうきみを蔵いけるかひなし、大納言此歌に恥て出仕もし給はず、常に籠居してぞおはしける。有為無常の境と云ひながら、命を惜身をかばふ事、定て可有後悔をや。年来芳志ある一門を捨て、他門に帰伏し給ぬる事、げにもいける甲斐なしとぞ人申しける。⁸⁾」と表現されている。

執筆時期が鎌倉末期から南北朝前期にかけての時期の作とされる『徒然草』の第二百十七段には、「或大福長者の云、『人は萬をさしおきて、ひたふるに徳をつくべきなり。まづしくは生けるかひなし、とめるのみを人とす。徳をつかんと思はば、すべからく、まづその心づかひを修行すべし。』」（『新日本古典文学大系 39 方丈記 徒然草』（岩波書店）286頁からの引用）とある。

紙幅に限りがあるため、詳細にそれぞれの意味を吟味することはできないが、多くが「生きていけばよいことが期待できる（あるいは、生きていてもよいことが期待できない）」「生きてきてよかった」「喜びがある（あるいはない＝がっかりしてしまう）」などと解釈することができる。一方、『徒然草』及び『源平盛衰記』における用例は、「生きている価値（がない）」あるいは「生きていても仕方がない」と解釈することが適当であると考えられる。これらはその文脈から人間の生き方に対する特定の望ましさを背景にして述べられていると考えられる。

今回検索した諸文の中では、「いけるかひ」は『徒然草』以降、狂言（4例）と俳句（1例）以外の文には見あたらず、『太平記』にあらわれる「生甲斐」と入れ替わるように使われなくなっていたことが推測される。もし、「生けるかひ」が「生きがい」に先行する語として使用されていたのなら、先に述べた梅棹の解釈を基にした「生きがひ」の意味の成り立ちについての推測は「生けるかひ」にこそ適用されるものであろう。

3) 「生きがひ」「生けるかひ」の同等語

「生きがひ」、「生けるかひ」及びその意味的類語と考えられる語が古典にどの程度使用されているかを示したものが表3である。両語を含め22語が示されている。

表3 古典文学にみられる「生きがひ」及び類語

	生甲斐(なし・に)	生けるかひ(あり・なし)	生てかひ(ある・なき)	生きても甲斐(なし)	生たる甲斐(なし)	生てゐるかいひ(もなし)	生るかひ(なき)	活るかひ	あるかひ	有(あり) 甲斐(もなく)	あるにかひなき	あるにも甲斐(なかりし)	あるにかひなき世	すむかひ(なし)	世に住める甲斐(は)なし	浮世の中に住んだ甲斐(はない)	かひなき命(無甲斐命)	あるにかひなき我が身	有る甲斐無き身	かひなき身	かひなき憂き身	甲斐なき露のみ
大和物語		1																				
宇津保物語		1			1																	
かげろふ日記		1																				
栄華物語		1	1						1													
源氏物語		9																			3	
枕草子		1																				
浜松中納言物語		6							1													
保元物語																	2					
平治物語																	7					
平家物語																	6	2				
建礼門院右京太夫集																					1	
慈雲短篇法語													1									
源平盛衰記		2	1		1				2								1			1		1
歎異抄																						
徒然草		1																				
太平記	1				1												8					
義経記					1												3					
曾我物語	1								1											1		
夜討ち曾我	1																					
好色一代女												1										
西鶴織留																3						
五十年忌歌念佛										1												
博多小女郎波枕				1																		
出世景清	1																					1
用明天王職人鑑																	1					
けいせい反魂香				1																		
落嘶千里藪卷之壺(名高き橋)						1																
嘶本体系 第十四卷八百屋お七 駒込のだん				1																		
嘶本体系 第四卷囃物語 咄物語下 趙飛燕昭儀物語				1																		
嘶本体系 第六卷 遊小僧														1								
浮世物語									1													
椿説弓張り月						1	2	2		1		1										
心中茜の染衣																						1
傾城禁摺本 傾城禁短氣 一之巻																1						
松浦佐用媛石魂録	1																					
	5	23	5	1	4	1	1	2	8	1	1	1	1	2	3	1	28	2	1	5	2	1

注) 和歌及び狂言については記載していない

「生きがひ」の用例は室町時代以降5例と決して多くない。「イケルカイ」は『源氏物語』で9例と『濱松中納言物語』で6例と突出しているが、他は6作品1例ずつである。また、軍記物では「かひなき命」の使用が目立つ。

ここでは「あるかひ」及び「かひなき命」をを取り上げ、「生けるかひ」「生きがひ」との意味的類似を見ることにする。表3にある通り、「あるかひ」は『栄華物語』や『濱松中納言物語』に使用例がある。また、それよりも早く『古今和歌集』にも「あしひきの山のまにまにかくれなんうき世中はあるかひもなし」(詠み人知らず)等の歌がある。1661年に刊行された浅井了意の『浮世物語』には「世の人またこれを尊みて名も高がりけるを、その子父に似ず志劣れる時は、家も衰微し名も埋もれて、ある甲斐もなく成果つるなり。後にはその子三度變化して、あらぬ者に成行くべし。」がある。

津田(1916)は天明～文久の頃の熊谷直好の歌を引用し、「『花も見つ月をも賞でつ世の中にあるかひ無しとは誰が言』(直好)、花月を愛し得るものにして始めて生きがひがある、というものさえいるではないか」(238頁10-11行)と述べている。「ある」が「生きる」や「生きている」と同等に使われており、熊谷直好の「あるかひ」は「生きる喜び」、「生きている実感」や「生きている意味」などと解釈可能であろう。

このように「あるかひ」は「生けるかひ」や「生きがい」と同じように用いられていたと考えられる。他の語についても同様の関係が考えられよう。このことからすると、「生けるかひ」や「生きがひ」は、梅棹の解釈を独占的に表す語ではなかったと言えるのではないか。

「かひなき命」はほとんどが軍記物に表れている。『保元物語』(2例)、『平治物語』(7例)、『平家物語』(8例)『源平盛衰記』(1例)、『太平記』(8例)、そして『義経記』(1例)であった。この他、近松の「用明天王職人鑑」に1例があった。それらの意味は「よいことが期待できない命」となると考えられるが、多くは戦に敗れ死罪になるところを助けられる場面や死ぬはずの場面で用いられている。したがって上記に加え「生きることが期待できない」や「死ぬはずの命」という意味も含んでいると考えることが適当であろう。「生きることが期待できない」から当然、その背景には「よいことが期待できない命」も関連してくるはずである。「かひなき命」の多くが軍記物に現わされたということは、この表現が当時の武士の死と生に対する考え方、あるいはそれぞれの作者の武士のあり方に関するとなえ方を反映しているものであるかもしれない。

3. 考 察

かつて(江戸時代以前)の「生きがい」は「世間あるいは自分の生きている社会に対して生きている意義」(和田, 2001)、「生きがいという言葉の意味は、古くは、社会に対して人が生きるに値するとして使用されていた。」(鶴若, 2003)や、さらに限定的な「社会によって制度化された生きがい」(野田, 1988)、であったのだろうか。もちろん私たちは相互に他との関わりにおいて生きており、共同体や社会の中で暮らしている。その意味においては、私たちのほとんどの営みがそれらの影響なしにはありえない。野田は、「社会によって制度化された生きがい」を説明するにあたり「死べき時にしなねば生き甲斐はさらに候わず」を引用し、「中世から近世までの生きがいは『死にがい』に對置していたと言える。」としている。平安時代末期に台頭してきた武士が戦いで死ぬことをおそれず、それを自然のこととしていたことは事実かもしれない。しか

し農民をはじめとした多様な民衆や公家や僧侶など武士以外の人々もそうした価値観を共有していたのであろうか。恐らくそうではないであろう。例えば、武士が台頭する前に実権を持っていた貴族社会の人々が武士と同じく戦での死を自然のこととしていたら武士に遅れをとることはなかったはずである。

それ以上に考えなければならないのは、それまでにもあった飢饉や自然災害や、夜盗や拐かしなどの犯罪に加え、武家が登場することによってもたらされたことである。それは安定した秩序とはほど遠いものであったと考えられる。歴史的事実を追えば、末法の世がはじまるとされたのは1052年、およそ100年経て保元の乱、平治の乱によって武家が歴史の表舞台に登場するとともに「末法の世」の感じ方が真実みを帯びはじめ、さらに源平の興亡が無常への共感を生み、承久の乱を経て武家政権が確立。一時の小康により「いざ鎌倉」という幕府への忠誠を表す言葉も現れたろうが、二度にわたる元寇（文永・弘安の役）によって恩賞も得られず、「いざ鎌倉」という意識は著しく低下、数次の幕府の内紛、さらには正中の変、元弘の変を経て建武の新政（鎌倉幕府滅亡）。不公平な論功行賞や権力闘争により建武の新政はきわめて短時間で挫折し、以降数十年にわたる南北朝の争乱、一時の小康の後、応仁の乱を端緒に戦国の争乱が100年以上にわたって続いたのである。このような状況では、道徳的あるいは倫理的な考え方や価値観が存在しても、それが世の中全体に大きな影響力を持ち得なかった時期は短くはなかったであろう。武力を持たない者はあまりにも無力な存在として生きなければならないことが多かったのかもしれない。江戸時代には、硬直化した身分社会が存在し、朱子学に基づく価値観が奨励されたとしても、武家の圧力に屈せず経済力を背景にした町人文化が発展した。武力を背景に設けられた枠組みが必ずしもものをいわなかったのではないか。

したがって、もしあったとしても「死にがい」に「生きがい」を対置できたのは、主に武家及びその周辺の人々であったのであろう。その一方でいつ争乱に巻き込まれ難民になってしまうか、最悪の場合は殺戮の対象になるかもしれない不安や恐怖にしばしば襲われたであろう民衆、権力に庇護され世俗化してしまう多くの僧侶、疲弊しながらも往時の残滓にすがり、あるいは武家に取り入る公家。いったいこうしたことが「社会により制度化された」とされるようなその社会を支配する、あるいは広く受け入れられる“生きがい”を生み出すことができたのであろうか。だからこそ鎌倉時代には、法然、親鸞、道元、栄西、一遍や日蓮などによる鎌倉仏教が生まれてきたのではないか。

一方、和田や鶴若が指摘する意味を含むと考えられる例は、『源平盛衰記』にみられる「生ける甲斐（無し）」、『徒然草』にみられた「生けるかひ（なし）」『夜討ち曾我』にあった「生き甲斐（なし）」とを挙げることができよう。前二者は、或る行動や生き方について第三者あるいは筆者の視点から批判的に述べられている言葉であった。後者はすでに指摘したとおり第三者を意識して上で述べられた言葉であった。前二者に注目すると、鎌倉時代中期頃には「(人として)生きる価値」を意味する使用が行われていたと考えられる。しかし、これらと異なる用例が多く存在したという事実は、こうした使い方が普遍的なものではなかったということを明確に物語っている。つまり、和田らが主張するかつての生きがいの意味は、幾つかの意味の中の一つに過ぎなかったということである。言い換えれば、生きる枠組みや価値観として限定的に生きがいを捉えることは難しいということである。

また、本稿では「生きがい」の前身を「生けるかひ」であったと推測した。生けるかひ（な

し)は、時には「がっかりする」のような比較的素朴な意味をも含んで用いられた。当初、「生けるかひ」はおそらく「(今、よいことがあった)これまで生きてきてよかった」というように過去から現在までの生を対象にして語られたものであろう。それが次第に前に述べたような意味の広がりを持つにいたり、その過程で現在から未来にかけての時間的な含みを持つ、これからへの「期待」という意味をも獲得していったものであろう。

また、「生きがい」や「生けるかひ」は同等語を多く持ち、その中の一つ一つの語に過ぎなかった可能性が考えられた。同一の意味を表すのになにも「生きがい」ではなくともよかったということである。

最後に本研究の限界について触れなければならない。「生きがい」という語が過去においてどのように意識され使用されていたかを明らかにするためには、本来、当時語られていた話し言葉の中での位置づけを知る必要がある。しかしこれはそのような資料がほとんど存在しないためにほぼ不可能である。そこで当時書かれた文によってそれに代えたわけだが、対象とした古典等は限られたものであるため、江戸時代以前の「生きがい」の全体像に関する本研究の位置づけは限定的なものである可能性がないわけではない。

注

- 1) 梅棹 (1985) 1970年に大阪で行われた「生きがいは」としてテーマに行われた朝日ゼミナールでの連続講座で梅棹が「人間と生きがい」を題目に講演したものが、『週刊朝日ゼミナール』に速記録として掲載された。これに梅棹が手を加えまとめたものが『わたしの生きがい論』として1981年刊行されている。
- 2) 『角川 古語大辞典』によれば、その用例の一つとして、連体修飾語を受けて「生けるかひなきや(源氏・夕顔)」のように本来二語であったものが一語化しても用いられた、とあり、「①行動の意図や配慮・期待などが裏切られた場合や、とうてい実現不能と意識した場合の失望やあきらめの気持ちを表す。効果がない。むだである。略。②期待を寄せる気にならないほどつまらないさま。とるにたりない。たよりない。③を客観化したもの。略。④信頼を寄せかねるほどいくじがないさま。ふがない。」(下線筆者)を意味として掲げている。
- 3) 国文学研究資料館の『日本古典文学大系』(旧版、岩波書店刊)の全作品(100巻580作品)の本文(テキスト)データベースである「日本古典文学本文データベース」、JTEXTS(日本文学電子図書館：<http://www.j-texts.com/index.html>)に収録された古典について検索を行った。なお、本研究であたった古典のうち上記データベースにないものについては全集等の印刷物で確認したものもある。
- 4) 十行古活字本を底本としている。
- 5) 鎌倉遺文フルテキストデータベース(東京大学史料編纂所)を利用させていただいた。
- 6) 国立国会図書館デジタル化資料(国立国会図書館)を利用させていただいた。
- 7) 活用の変遷も考慮すると、「イキガイ」は室町時代のいずれかの時期にあらわれたと考えるのが適当であろう。
- 8) J-TEXTS(日本文学電子図書館)を利用させていただいた。

文献

- 荒木繁・池田廣司・山本吉左右(偏注)(1983)『幸若舞3 敦盛・夜討曾我他』(東洋文庫426) 平凡社
井上勝志(2009)『近松門左衛門「曾根崎心中」「けいせい反魂香」「国性爺合戦」』(角川ソフィア文庫) 角川書店
市古貞次・大島建彦(校注)(1966)『日本古典文学大系88 曾我物語』岩波書店

- 梅棹忠夫 (1985)『私の生きがい論 — 人生に目的があるか —』講談社
- 遠藤嘉基・松尾聰 (校注) (1964)『日本古典文学大系 77 篁物語 平中物語 濱松中納言物語』岩波書店
- 後藤丹治・釜田喜三郎 (校注) (1960)『日本古典文学大系 34 太平記一』岩波書店
- 村上学 仮名本曾我物語解題稿 『曾我物語 下』(村上学・徳江元正・福田晃 (編)) 伝承文学資料集第四輯
伝承文学研究会
- 村上学・徳江元正・福田晃 (編) (1971)『曾我物語 中』 伝承文学資料集第四輯 伝承文学研究会
- 室伏信助 (訳注) (2001)『新版 竹取物語 現代語訳付き』 角川書店
- 中村晃 (訳) (2005)『完訳源平盛衰記六』 勉誠出版株式会社
- 櫻井光昭 (1977) 生クの活用について 国語学 110 pp.1-18.
- 佐竹昭広・久保田淳 (校訂) (1989)『新日本古典文学大系 39 方丈記 徒然草』岩波書店
- 下中邦彦 (編) (1976)『日本語の歴史 5 近代語の流れ』平凡社
- 鈴木一彦・林巨樹 (1972)『品詞別日本文法講座第三巻』明治書院
- 田中登 (1987)『校訂 貫之集』泉書店
- 玉上琢彌 (訳注) (1964-1972)『源氏物語第 1 巻～第 8 巻』角川書店
- 津田左右吉 (1916)『文学に現はれたる我が国民思想史の研究』 第 4 巻 平民文学の時代 中 (引用は岩波文庫
版第 8 巻から)
- 鶴若麻里 (2003) 語り (ナラティブ) からみる高齢者の生きがい 早稲田大学人間科学研究科博士 (人間科学)
学位論文
- 土居忠生・森田武・長南実 (編訳) (1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 野田正彰 (1988)『生きがいシェリング — 産業構造転換期の勤労意識 —』中央公論社
- 湯沢幸吉郎 (1943)『国語史概説』勉誠社
- 和田修一 (2001) 近代社会における自己と生きがい : 『生きがいの社会学 — 高齢社会における幸福とは何か—』
高橋・和田編 弘文堂
- 渡辺実 (校訂) (1991)『新日本古典文学大系 39 枕草子』岩波書店

データベース

- 平安遣文フルテキストデータベース 東京大学史料編纂所
J-TEXTS 日本文学電子図書館
- 鎌倉遣文フルテキストデータベース 東京大学史料編纂所
- 国立国会図書館デジタル化資料 国立国会図書館
- 古記録フルテキストデータベース 東京大学史料編纂所
- 古文書フルテキストデータベース 東京大学史料編纂所
- 奈良時代古文書フルテキストデータベース 東京大学史料編纂所
- 大系本文 (日本古典文学・断本) データベース 国文学研究資料館